緑豊かな奈良山霊苑に建立された供養塔は、自然との共生など、周辺環境とのバランスについてもさまざまな配慮がなされている。

死者救済を目指して

六角宝篋印塔を永代供養塔にした合祀墓

お墓の新しい形の一つ　設計・制作／㈲翼石材

今年4月、愛媛県北宇和郡の奈良山霊苑に永代供養塔と基壇、納骨堂が建立された。これは愛媛県北宇和郡の㈱山下石材（愛媛県北宇和郡松野町松丸310 TEL0895―42―0136）山下武久社長が、2年前より最高の供養塔を建立して、地域に貢献、みんなを幸せにしたいという想いから計画。その想いを受け香川県高松市の㈲翼石材（青木秀敏社長）高橋晋也さんが設計・制作をしたもの。

少子化・核家族化が進み、お墓を建てられない、あるいはお墓はあるが、承継者がいないことなどから、合祀墓や納骨堂のニーズが増えている。そんな中、〝死者救済〟をコンセプトに「世伝石塔シリーズ」を手がける㈲翼石材が提案した供養塔、合祀墓、納骨堂をご紹介したい。

世伝石塔シリーズ

今回の供養塔になったのは、実は世伝石塔シリーズ第二弾「六角宝篋印塔」。これは以前弊紙でも紹介したことがあるが、高橋さんの熱い思いに始まる。

高橋さんは22歳頃から、建設業に係わった事から〝茶庭の侘びさび〟に興味があり、茶庭の設計・施工に係わり京都の庭などで見かけた「宝篋印塔」「宝塔」「五輪塔」などがきっかけ。深くその世界に興味を抱くようになると、より古いもの、原点を求めようという意識が加速、石造美術の全盛期である鎌倉時代に辿り着く。

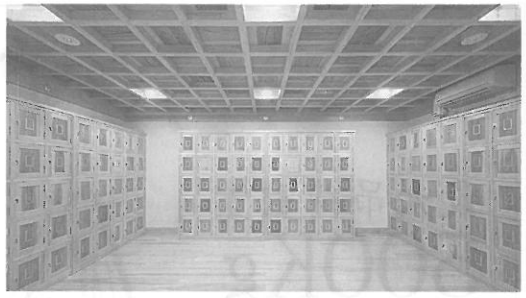
㈲翼石材 高橋晋也氏

古書を探し、各地を訪ね歩き、見聞を深め、そして当時の石工の作品にも感動し心奪われるようになった高橋さんは、この素晴らしい作品の数々をいつかお墓を建てる人に紹介したい、という熱い想いを究極の死者救済に繋げようと『世伝石塔シリーズ』に収斂（しゅうれん）したのだった。

このシリーズには、平成22年発表の第一弾「宝塔」、第二弾「六角宝篋印塔」、昨年発表の第三弾「大面取五輪塔」、今年発表の第四弾「三重宝篋印塔」がある。

今回高橋さんに依頼することになった山下さんは、第二弾「六角宝篋印塔」に一目ぼれ。もちろん、ただ形や加工だけにほれたわけではない。山下石材自体、厳選された国産石材を自社工場内で加工する技術を持っていることもあり、高橋さんのお墓に対する想い、考え方に共感したことが大きいのだ。

山下さんは、自身が霊苑管理組合長を務める奈良山霊苑に2年前から最高の供養塔を建立して、地域に貢献、みんなを幸せにしたい、という想いから、色々と想いをめぐらせ、六角宝篋印塔を供養塔にしよう、との考えに至っていた。



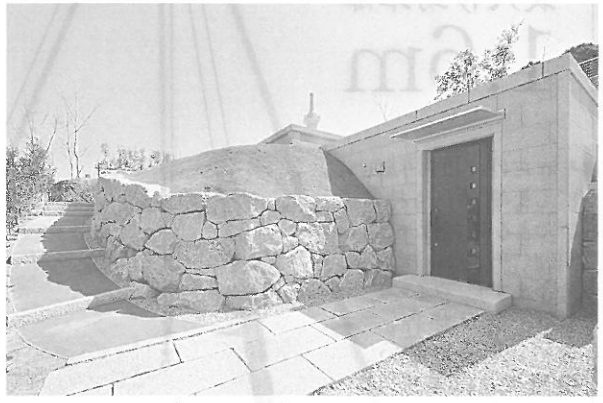
左／基壇内の合祀墓内部、上の穴が摩尼宝珠に繋がっている。
右／堂宮大工によって、釘を使わずに建てられた納骨堂内部。

静かに安らかに快適に祭祀・供養できる納骨堂

山下氏は、供養塔の下に半地下の納骨堂の設置を思いついたこともあり、〝この仕事は、高橋さんだ〟と、すぐに連絡。この想いに断るはずもない高橋さんは、すぐに愛媛に駆けつける。

高橋さんは、納骨堂を単にお骨の置き場所ではないという考えから、知り合いの地下室メーカーに相談。そこは、大手住宅メーカーが委託するほどの専門業者で、実績も並みではない。その特長は、温度差がなく結露・カビが起こらない上に、年間エアコン代数千円程度と、ランニングコストもほとんどかからないというもの。地下室の箱を工場で作ってくるのでたった2日で施工が出来る。

出来上がった納骨堂を見た山下さんは、「木のにおいのする素晴らしく気持ちのいい空間になっている」と大満足。



職人が積み上げた石垣が守る、納骨堂へのアプローチ。

基壇を合祀墓に摩尼宝珠の力

次に、安心して合祀する場所がほしい、ということで、もともと塔を荘厳するための基壇を合祀墓にすることに。

最高の基壇をと、高橋さんは全国を調べまわるうちに、どうしても中世に作られた非公開の基壇を見ずにいられなくなってしまった。どうしてもその基壇を見たいと、そこに見学のお願いをし続けた結果、気持ちが伝わりやっと見学させてもらえることになる。その基壇を見た高橋さんは、摩尼宝珠が配されていたことに驚き、その摩尼宝珠の下には歴代住職の火葬骨が納められていた。高橋さんは「これだ！」と確信したという。

「摩尼宝珠には宝篋印塔と同じような力があると思うので、単に合祀ではなく、祭祀・供養する